

Title	平尾浩三教授経歴・主要業績
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1999
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.76, (1999. 10) ,p.342(31)- 345(28)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	黒岩純一, 平尾浩三両教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00760001-0345

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

平尾 浩三教授 経歴・主要業績

主な経歴

学歴

- 昭和 32 年 3 月 東京大学教養学部教養学科「ドイツの文化と社会」分科卒業。
- 昭和 32 年 5 月 ドイツ連邦共和国ハンブルク大学文学部ドイツ文学科に留学（32 年 5 月より 33 年 2 月まで World University Service による奨学資金, 33 年 3 月より同年 8 月まで Deutscher Akademischer Austauschdienst [DAAD] による奨学資金の給付を受ける）。
- 昭和 33 年 9 月 同国フライブルク大学文学部ドイツ文学科において研究を続行（40 年 2 月帰国まで。同期間, 同大学日本語講師を兼ねる。職歴参照）。

職歴

- 昭和 33 年 9 月 ドイツ連邦共和国フライブルク大学文学部講師に就任。日本語授業を担当。
- 昭和 40 年 2 月 同大学を退職, 帰国。
- 昭和 40 年 4 月 中央大学文学部専任講師（独文学専攻）に就任。
- 昭和 42 年 4 月 同大学助教授に昇任。
- 昭和 44 年 3 月 同大学を退職。
- 昭和 44 年 4 月 東京大学教養学部助教授（外国語科）に就任。同学部前期課程ドイツ語および後期課程（教養学科）「ドイツの文化と社会」分科の授業を担当。
- 昭和 49 年 4 月 同大学大学院人文科学研究科の授業を担当（独語独文学専攻, 中世独語学・中世独文学。52 年 3 月まで）。
- 昭和 52 年 4 月 同大学教養学部教養学科第二・ドイツ第三講座所属助教授。
- 昭和 58 年 4 月 同大学大学院総合文化研究科地域文化研究専門課程担当（63 年 3 月まで）。

昭和 60 年 4 月 同大学教授に昇任，教養学部教養学科第二・ドイツ第三講座担任。

平成元年 3 月 同大学を退職。

平成元年 4 月 慶應義塾大学文学部教授（独文学専攻）に就任。

平成 7 年 5 月 東京大学名誉教授，現在に至る。

平成 12 年 3 月 慶應義塾大学文学部教授を定年退職。

兼務歴等

昭和 43 年 4 月 NHK ラジオ語学講座講師（50 年 3 月まで）。

昭和 53 年 11 月 ドイツ連邦共和国ヴュルツブルク大学に出張。同大学中国学研究所講師（日本学，55 年 9 月まで）。

昭和 61 年 5 月 同大学に再度出張。同大学中国学研究所講師（日本学，62 年 2 月まで）。

平成 7 年 11 月 慶應義塾女子高等学校長（11 年 9 月まで）。

学会活動等

昭和 52 年 5 月 日本独文学会理事（1 期 2 年）。

昭和 58 年 5 月 日本独文学会理事（2 期 4 年）。

昭和 63 年 „Germanistik“ (Internationales Referentenorgan mit bibliographischen Hinweisen)の Internationaler Beirat（平成 9 年まで）。

平成元年 5 月 日本独文学会理事（2 期 4 年）。

平成元年 6 月 日本ユネスコ国内委員会文化活動小委員会日本文学代表作品翻訳分科会委員（平成 4 年 3 月まで）。

平成 3 年 5 月 日本独文学会理事長（1 期 2 年）。

平成 4 年 4 月 日本学術振興会日独科学協力事業委員会委員（平成 8 年まで）。

平成 4 年 11 月 文部省学位授与機構審査会専門委員，現在に至る。

平成 5 年 4 月 財団法人 ドイツ語学文学振興会理事，現在に至る。

平成 7 年 5 月 日本独文学会理事（2 期 4 年，平成 11 年 5 月まで）。

平成 7 年 8 月 日本学術会議 語学・文学研究連絡委員会委員（平成 11 年 7 月まで）。

平成 8 年 5 月 財団法人ドイツ語学文学振興会理事長，現在に至る。

主要研究業績

I 編著訳書

1. 『ドイツ基本語辞典』(岩崎英二郎・早川東三・子安美知子・鐵野善資と共編) 白水社 昭和46年4月。
2. Junnosuke Yoshiyuki: „Regenschauer“. (E. v. Collani・J. Ebert 等と共訳) 同学社 昭和57年4月。
3. ハインリヒ・ブレティヒャ:『中世への旅 — 騎士と城』白水社 昭和57年5月。
4. ハルトマン・フォン・アウエ:『エーレク』(『ハルトマン・フォン・アウエ作品集』〔第19回日本翻訳文化賞受賞〕所収) 郁文堂 昭和57年5月。
5. コンラート・フォン・ヴェルツブルク:『コンラート作品選』郁文堂 昭和59年3月。
6. 『独和大辞典』(国松孝二・岩崎英二郎等と共編) 小学館 昭和60年1月。
7. 『物語にみる中世ヨーロッパ世界』(木村尚三郎・新倉俊一等と共著) 光村図書出版 昭和60年3月。
8. 『必携ドイツ文法総まとめ』(中島悠爾・朝倉巧と共著) 白水社 昭和60年4月。
9. 『ザイフリート・ヘルブリング — 中世ウィーンの覇者と騎士たち』〔第28回日本翻訳文化賞受賞〕郁文堂 平成2年11月。
10. ヨアヒム・ブムケ:『中世の騎士文化』(和泉雅人・相澤隆・斎藤太郎・三瓶慎一・一條麻美子と共訳) 白水社 平成7年5月。
11. „Sprache, Literatur und Kommunikation im kulturellen Wandel. Festschrift für Eijiro Iwasaki anlässlich seines 75. Geburtstags“ (早川東三・千石 喬・木村直司と共編) 同学社 平成9年4月。

II 学術論文

1. 『Heliand 555, 3752 における kumad gifaran, gifaran quâmun に関して』中央大学文学部文学科紀要第19号(昭和40年12月)。
2. „Fügungen des Typs 'kam gefahren' im Deutschen“. Beiträge zur Geschichte der deutschen Sprache und Literatur (PBB). Bd. 87 (1965), H. 1./2.

3. 『1950年代以後の西ドイツ・ゲルマニスティク (Alte Abteilung) に関する一考察』中央大学文学部文学科紀要第20号 (昭和41年3月)。
4. „Einige Bemerkungen zum Entsprechungsgrad von ‘miru’ und ‘sehen’“. (Korreferent: Helmut Röller) 東京大学教養学部外国語科研究紀要第21巻 (昭和48年9月)。
5. 『„The Lady of the Fountain“ (Mabinogi), „Yvain“ (Chrétien), „Iwein“ (Hartmann) — 冒頭の Artushof および Kalogrenants âventiure をめぐる Streifzüge — 』東京大学教養学部教養学科紀要第9号 (昭和51年3月)。
6. 『ドイツ中世叙事詩に用いられた grüezen, gruoze に関する覚書若干』 (『ドイツ文学における宗教体験と世界認識 — 文部省科学研究費補助金助成による研究報告書 — 』所収) 朝日出版社 昭和53年3月。
7. 『「エーレク」解説』 (上記I, 4 所収) 郁文堂 昭和57年5月。
8. 『「コンラート・フォン・ヴェルツブルク」解説』 (上記I, 5 所収) 郁文堂 昭和59年3月。
9. 『秘められた詩学』 (轡田収編『文芸史と文芸理論 — 文学の歴史と理論 — 』所収) 放送大学教育振興会 昭和61年3月。
10. 『「サイフリート・ヘルプリング」論考』 (上記I, 9 所収) 郁文堂 平成2年11月。
11. 『中高ドイツ語文芸作品における wiplich と manlich — その使用の状況をめぐる覚書』慶應義塾大学藝文学会『藝文研究』第60号 (平成4年3月)。
12. 『アーサー王物語の系譜』日本ゲーテ協会編『ゲーテ年鑑』第36号 (平成6年10月)。
13. „Anmerkungen zum Gebrauch von *immer* im Kaleidoskop des historischen Wandels“. (上記I, 11 所収) 同学社 平成9年4月。
14. „Rittertum und Todesnähe als Tradition der japanischen Dichtung“. In: *Imagines medii aevi. Interdisziplinäre Beiträge zur Mittelalterforschung*. Wiesbaden 2000.
15. „Kleine Spurenlese zu den Fügungen des Typs <immer + Komparativ des Adjektivs>“. In: *Vom Mittelalter zur Neuzeit. Festschrift für Horst Brunner anlässlich seines 60. Geburtstags*. Berlin 2000.